

第67回

# 午後のコンサート。

～アラウンド・ザ・ワールド～

指揮とお話:ダン・エッティンガー

ピアノ&ナビゲーター: 三船 優子

Dan Ettinger, conductor

Yuko Mifune, MC & piano



Chie Ito.

J.シュトラウスII

喜歌劇『こうもり』序曲 (約8分)

ドビュッシー

牧神の午後への前奏曲 (約11分)

ガーシュウィン

ラブソディー・イン・ブルー (約16分)

— 休憩 —

ホルスト

組曲『惑星』より"木星" (約4分)

外山雄三

『管弦楽のためのラブソディ』より"八木節" (約3分)

マルク・ラプリー

組曲『イスラエル舞曲』より"ホラ" (約2分)

ワーグナー

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』より前奏曲 (約11分)



午後のコンサート。3/20

2016年3月20日(日) 14:00  
東京オペラシティ コンサートホール

主催:公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

協賛:三菱UFJニコス株式会社

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業)

 プラボー!オーケストラ(NHK-FM放送)にて後日放送予定

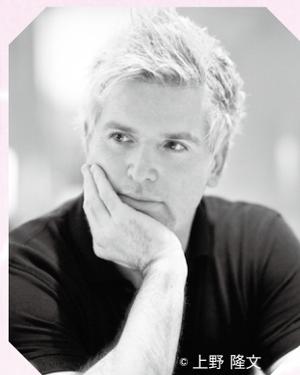


## Artists' Profile

## 指揮とお話 ダン・エッティンガー

Dan Ettinger, conductor

マンハイム国民劇場音楽総監督、イスラエル交響楽団音楽監督。2003年から2008年までベルリン国立歌劇場カペルマイスター兼音楽監督(ダニエル・バレンボイム)助手を務め、ウィーン国立歌劇場、ロスアンジェルス・オペラ、バイエルン国立歌劇場、ワシントン・ナショナル・オペラ、メトロポリタン・オペラ、英国ロイヤル・オペラ、パリ・オペラ座など世界の主要歌劇場に出演。新国立劇場には2004年『ファルスタッフ』以来毎シーズン登場し、2006年新制作『イドメネオ』をはじめ、『ニーベルングの指環』全曲(2009年『ラインの黄金』『フルキューレ』、2010年『ジークフリート』『神々の黄昏』)の指揮で大好評を博した。東京フィルには2005年4月定期公演以来数多く登場し、2010年4月より2015年3月まで常任指揮者を務めた。現在は桂冠指揮者に就任している。



◎ 上野 隆文

## ピアノ&amp;ナビゲーター 三船 優子

YuKo Mifune, Piano &amp; MC

1988年第57回日本音楽コンクール第1位。桐朋学園大学首席卒業後、文化庁派遣研修員としてジュリアード音楽院に留学。1991年にロス・アンジェルスにてアメリカデビューを果たす。同年フリーナ・アワーバック国際ピアノコンクールで優勝。翌年帰国し、本格的に日本での演奏活動を再開、リサイタルはもとより、国内外の主要オーケストラとも共演を重ねる。

2001年、韓国ソウル国際音楽祭に出演、2007年夏にはニュージーランド・ツアーを行い、2011年1月にはシンガポールにてリサイタルを行なう。2013年には、パリ・ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団と日本ツアーで共演、好評を博した。

これまでに、「ラブソディ・イン・ブルー」「バーバー:ピアノ作品集」など6枚のCDをリリース。また、NHK-BS「週刊ブックレビュー」の司会を6年間にわたり務めるなど多方面で活躍。

シャープで切れのあるタッチ、繊細な美しい音色とダイナミックな演奏でつねに聴衆を虜にし、古典から現代音楽に至るそのレパートリーの幅広さにも定評がある。

京都市立芸術大学非常勤講師。 <http://www.yukomifune.com>



◎ 武藤 章

## 午後のコンサート。

## Program Notes

## プログラム・ノート

解説: 柴田克彦

今回のテーマは「アラウンド・ザ・ワールド」。クラシック音楽で世界を巡ります。指揮は、東京フィルの前常任指揮者、ダン・エッティンガー。在任中は「午後のコンサート」でも豊かな音楽性を発揮した彼の久々のステージが、実に楽しみです。

プログラムには、マエストロが訪れたことのある国＝オーストリア、フランス、アメリカ、イギリス、日本、ドイツ、そして母国イスラエルの音楽が並んでいます。しかもただの名曲集ではなく、ウィンナ・オペレッタ初の成功作にして同分野の大看板曲『こうもり』、近代音楽の幕開けを告げた『牧神の午後への前奏曲』、史上初のシンフォニック・ジャズ『ラブソディ・イン・ブルー』、オーディオ時代への端緒となった『惑星』、世界の聴衆に初めて認知された和製クラシック『管弦楽のためのラブソディ』、ドイツ精神の象徴となった『ニルンベルクのマイスターズinger』と、すべてがエポックメイキングな作品です。音楽自体も各国の特徴を表していますし、オーケストレーションの相違も聴きどころ。少女時代をアメリカで過ごした三船優子が弾くガーシュウィンも、むろん期待大!です。

## ウィーンのおペレッタの代表作

幕開けは、オーストリアの都ウィーンが生んだ“ワルツ王”**ヨハン・シュトラウス2世 (1825-1899) の喜歌劇『こうもり』序曲**。シュトラウス2世は、『美しく青きドナウ』をはじめとするワルツやポルカの名曲を数多く残した後、40代半ばの1870年頃からはオペレッタ(喜歌劇)の創作に主軸を移しました。そして1874年初演の第3作『こうもり』(全3幕)で大成功を収め、同曲はシュトラウス自身のみならず、古今の全オペレッタの代表作となりました。物語は、友人アイゼンシュタインからこうもりの扮装のまま置き去りにされたことで「こうもり」のあだ名が付いたファルケ博士が仕掛ける、愉快な復讐劇。華やかな夜会に、アイゼンシュタイン夫妻の浮気や小間使いの野心などが絡み、最後は「すべてシャンパンのせい」となります。

序曲は、劇中の旋律が次々に登場するポプリ(接続曲)風の構成。これはスッペをはじめとする当時のオペレッタ序曲の常套手段でもありました。曲は元気よく開始。オーボエの柔らかな旋律、第2幕の6時の鐘の音、各幕の三重唱や第2幕のワ

ルツなど様々な旋律が登場し、華やかに終結します。浮き立つような気分の中にメランコリックな風情が混じった愉しさ満点の名曲です。

## フランス印象主義の官能、アメリカのジャズ&クラシックの融合

おつぎはフランスへ。前曲と対照的なテイストをもつ、同国近代音楽の大家**クロード・ドビュッシー (1862-1918) の『牧神の午後への前奏曲』**です。ドビュッシーは、旧来の伝統的な和声や形式を脱して音楽における印象主義を確立し、20世紀音楽の扉を開きました。1894年に完成&初演された同曲は、管弦楽の分野で印象主義を打ち立てると同時に、近代音楽の始まりにも位置付けられる、音楽史上の記念碑的な作品です。

曲は、象徴派の大詩人ステファヌ・マラルメの詩「牧神の午後」の「音による自由な挿絵」(ドビュッシー)を意図したものの。初演ではアンコールされるほど好評を博し、ドビュッシーと親交のあったマラルメも聴いて感激したといわれています。

牧神とは、山羊の足と尻尾をもち、笛を手にしている半人半獣の神。同曲では、「昼の眠りから目覚めた牧神は、2人のニンフ(水の精)を見つけ、捕えようとするが、ニンフはやがて逃げていってしまう。牧神はふたたび夢かうつつかわからないまどろみへと落ちていく」といった詩のイメージが表現されます。冒頭に無伴奏のフルート・ソロで奏される物憂げな主題が、どこにも着地することなく自由に移ろい、揺れ動きながら展開。官能的・夢想的な世界が、強音を避けた透明な響きによって描かれていきます。

今度はアメリカへ渡ります。ポピュラー、クラシックの両面で活躍した20世紀アメリカを代表する作曲家**ジョージ・ガーシュウィン (1898-1937) の『ラプソディ・イン・ブルー』**。同曲は、ジャズとクラシックの手法を融合して“シンフォニック・ジャズ”と呼ばれる新ジャンルを切り開いた作品です。1924年、ジャズ・バンドのリーダー、ポール・ホワイトマンが、ニューヨークにおける「近代音楽の実験」と題した演奏会の目玉として依頼したものの、ガーシュウィンは当初乗り気薄。しかし新

聞に「作曲中」と書かれて後に引けなくなり、3週間で曲を完成しました。このとき、ボストンに向かう汽車の中で楽想を得たとのエピソードは有名です。初演は、後に『グランド・キャニオン』で名を成すグローフェ編曲のジャズ・バンド版で行われ、同じ編曲者によるオーケストラ版で広く普及していきました。

内容をひとこと言えれば、“ピアノ協奏曲のスタイルをとるジャズ風のラプソディ”。主に6つの旋律が、ピアノのカデンツァ(奏者が腕前を披露するソロの部分)を挟みながら接続されていきます。ラグタイム風のリズムやブルース風の和声をまじえた音楽は概ねポピュラー寄りのテイスト。冒頭でクラリネットが奏する上昇グリッサンドはインパクトが強く、これに続いて奏される旋律が全体の重要な主題となります。

## イギリスと日本、イスラエル。 それぞれの国の代名詞

後半はイギリスからスタート。同国の近代音楽を代表する作曲家の一人、**グスターヴ・ホルスト(1874-1934)**の組曲『惑星』より“木星”です。『惑星』は、地球を除く太陽系の惑星を描いた全7曲の組曲。1914~1916年=第1次世界大戦のさなかに作曲されました。ただし作曲の発端は占星術への興味で、天文学やSF的な見地ではなかったようです。1920年の全曲初演当時は好評だった同曲も一時忘れられかけましたが、1960年代にカラヤン指揮/ウィーン・フィルの録音が出て急浮上。20世紀半ば以降の宇宙時代と連動して世界的なヒット作となり、スペクタクルな音楽は、ステレオ装置の進化に伴っていっそう人気を高めました。

全体は、7つの惑星が地球から近い順に並べられ、神話に由来する名が付されています。第4曲“木星—快樂をもたらす者”は、全体の中心に置かれた、最も大規模で変化に富んだ1曲。4つの主題に基づく喜びに充ちた音楽で、6本のホルンが主導する豊麗・芳醇なサウンドが特徴を成

しています。特に、テンポを落とした中間部の流麗な旋律は、以前から歌としても愛されており、日本ではかつて平原綾香が「ジュピター」の題でヒットさせました。

次はいよいよ日本へ。指揮者としても活躍する作曲家、**外山雄三(1931- )**の代表作『**管弦楽のためのラプソディ**』より“**八木節**”です。『ラプソディ』は、1960年、外山自身も指揮者として参加したNHK交響楽団の世界一周演奏旅行のアンコール用に作曲され、ツアー前の同年7月、東京都体育館で初演されました。ツアーでは39公演で演奏されて大人気を集め、その後も日本のオーケストラの海外公演(国内でも)の定番曲になっています。曲にはおなじみの民謡が多数登場。拍子木、うちわ太鼓、締太鼓、チャンチキといった伝統的な打楽器を用いながら、日本の古い素材と西洋のモダンな要素が巧みに融合されていきます。

曲は大きく3つの部分から成り、最後にあたる“八木節”では、おなじみの俗謡(狭義では北関東の盆踊り歌)が、盛大に鳴り響きます。打楽器を駆使した元気一杯の音楽は、もはや説明不要。あえて

言えばハープのグリッサンドが西洋的な効果を加えます。

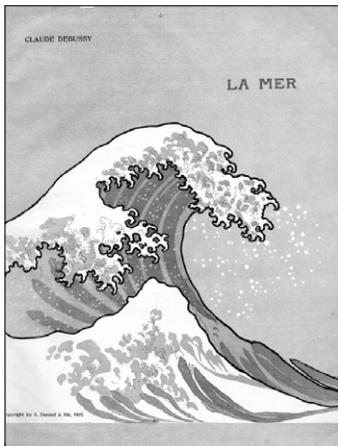
ここでマエストロの母国イスラエルの音楽を。**マルク・ラブリー(1903-1967)**の組曲『**イスラエル舞曲**』より“**ホラ**”です。ラブリーは、ラトヴィア生まれですが、1935年当地に移住し、作曲家および指揮者として活躍しました。組曲『イスラエル舞曲』は1946年の作。“ホラ”は全6曲中の第5曲にあたる短い作品です。マエストロいわく「ホラはイスラエルの民衆の踊りの一種で、有名な『マイムマイム』もホラ」。曲は、まさにフォークダンス調の軽快で歯切れよい音楽です。

## ドイツを代表するオペラ作曲家 ワーグナーの円熟期の大作より

締めくくりは、ドイツ・ロマン派オペラの巨人**リヒャルト・ワーグナー(1813-1883)**の**楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』より(第1幕への)前奏曲**。オペラ自体は、1867年に完成され、翌年初演された、円熟期の大作です。「マイスタージンガー」とは、中世ドイツにおける、「歌手=ジンガー」の能力を備

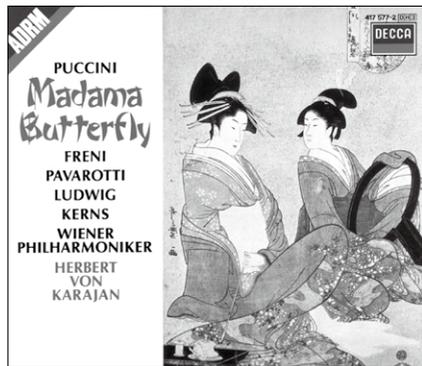
えた「職人の親方=マイスター」のこと。当時の親方は、技術のみならず歌の自作および歌唱能力が求められたことに拠る物語です。本編は「靴屋の親方ザックスが、金細工師の親方の娘エヴァに恋する騎士ヴァルターを助け、歌合戦に勝たせてエヴァを獲得させる」といったお話。ワーグナーの本格作の中で唯一の喜劇的要素をもつオペラです。

前奏曲は、劇中の動機を多数用いて構成された、壮麗でドラマティックな音楽。全合奏による「マイスタージンガーの動機」で堂々と始まり、柔和な「愛の情景の動機」を経て、明るい「行進の動機」が奏されます。さらに複数の動機が現れた後、「愛の動機」に始まる優美な部分となり、やがて「マイスタージンガーの動機」が再登場。複数の動機が交錯しながら高揚し、「行進の動機」を中心とした華やかな終盤を迎えます。対位的な動きや重層感が際立っており、全体の半ば過ぎで3つの動機が同時進行する場面は、特に聴きどころとなります。



ドビュッシーの交響詩『海』スコアの表紙には葛飾北斎「神奈川沖浪裏」の一部が用いられています。

プッチーニの歌劇『蝶々夫人』もまた日本をモチーフに作曲された名作。(カラヤン指揮 ウィーン・フィルのCDジャケットより)



## ヨーロッパで人気を呼んだ“ジャポニズム”

“日本風味”のクラシック音楽は、外山雄三など邦人勢の専売特許にあらず。実は結構前から存在しており、今回の作曲家の中では、ホルストが『日本組曲』なる管弦楽曲を作曲しています。これは『惑星』と同時期の1915年、日本の舞踊家のロンドン公演用に使われたもの。「ねんねんころりよ〜」の「江戸の子守唄」ほか日本古謡が複数使われていますが、意外に西洋風の真面目(?)な音楽です。CDも出ていますので、興味ある方はご一聴を。またドビュッシーも、交響詩『海』のスコアの表紙に葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」を用いたり、緋鯉が泳ぐ漆絵から着想を得たピアノ曲『金色の魚』を書いたりしています。

これらは、19世紀後半～20世紀初頭のヨーロッパで流行った“ジャポニズム”に拠るところ大。特にオペラは、サン＝サーンスの『黄色い王女』(1872)やサリヴァンの『ミカド』(1885)など、日本を扱った作品が10数曲も作られました。2016-17シーズンの東京フィル定期では、その中で最も有名なプッチーニの『蝶々夫人』(1904)が7月にチョン・ミョンフンの指揮、それに次ぐ名作であるマスカーニの『イリス』(1898)が10月にバットイストーニの指揮で披露されます。乞うご期待!

しばた・かつひこ (音楽ライター) / 音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。